

漢方用語	読み方	意味
あ行		
あけい	あんげい	鼻息
あけい	あんげい	食べ物を入れ(受納)、消化し(腐熟)、腸へ送る(和降)という3つの機能
あけい	あんげい	過度の休息、運動不足
あけい	あんげい	食道通過障害、食道上部の通過障害による嚥下困難が「積」、下部によるものが「積」
あけい	あんげい	みぞおちを指すあるいは拳で軽くたたくと、胃内からの水音が聞えることで心下振水音ともいう
あけい	あんげい	尿赤
あけい	あんげい	口からの分泌液で、色が濃く濁っている
あけい	あんげい	病気の原因が食事
あけい	あんげい	栄養とは経脈を巡って養う気、栄養とは経脈の外にあって外邪から防衛する気。栄養は消化吸収された栄養分を指し、衛気は水穀の悍気の中で入ることができず、皮膚や肉の中を流れる気
あけい	あんげい	しゃべり、嚥下、乾嘔ともいう
あけい	あんげい	漢方学的に病った治療(腸治、逆治)を行った結果、症状が変化して複雑になった状態
あけい	あんげい	毒を出して吐くこと
あけい	あんげい	青色い汗
あけい	あんげい	血がスムーズに流れずに滞っている状態
あけい	あんげい	痲疹、副子、桂枝などの温熱薬を配合した大費附子湯、桂枝加芍薬湯など
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	咳血
あけい	あんげい	体の外面に現れた症状
あけい	あんげい	食道通過障害、食道上部の通過障害による嚥下困難が「積」、下部によるものが「積」
あけい	あんげい	経脈間を走る気と下焦の気、経脈を伴う場合、その状態が腑のほろひのよりに見えるもの
あけい	あんげい	腑内が凝りこみ、腑内は陰陽のことで、経脈とは絡みでも凝りこみ
あけい	あんげい	すでにある処方(=薬方)に、必要に応じて処方の生薬を加えたり(加方)、減らしたり(減方)すること
あけい	あんげい	マクワリウのへたのことで解吐薬
あけい	あんげい	すでにある処方(=薬方)に、必要に応じて処方の生薬を加えること
あけい	あんげい	てんかん
あけい	あんげい	①神経管で虚弱な小児には「疳の虫」がいると考えられた②牙疳(歯肉腫、口内潰瘍)、下疳(陰部潰瘍)など
あけい	あんげい	大費や平補のような寒涼薬の入った方剂
あけい	あんげい	主に経脈の急性疾患に対して行う治療法で、病部が体表や深い部分にある時は汗法(汗をかかせる發表剤)、少し深い部分にある時は吐法(吐かせる瀉下剤)、さらに深い部分にある時は下法(下させる攻剤)を用いる
あけい	あんげい	病気の性質が薬証か脈証か対する性質のどちらであるかを判断し、診断を下すこと
あけい	あんげい	腎臓による動悸の脈証
あけい	あんげい	血は気から作られ、その血は気に変化することもあるように気血は車の両輪のように密接に連携しながら人体の生理を支えている。気と血のどちらか一方が乱れもう一方に深刻な影響を与え、病気が起きること
あけい	あんげい	体を構成し、その活動を支えている気、血、水の理論をもとに病気の原因を見極める方法
あけい	あんげい	気血を改善する処方(薬方)を指す
あけい	あんげい	しばしば唾液が口の中にとまり、しきりにつばを吐くこと。寒熱の症状の一つ
あけい	あんげい	しゃべり
あけい	あんげい	よく物忘れすること。病気の症状の一つ
あけい	あんげい	子どもが急に驚かされたり怖いものを見せられたりして、おびえること。また、そのために患う一種の心身症
あけい	あんげい	汗がいつまでも起る症状で、虚証は汗のせいで現れたり隠れたりする症状
あけい	あんげい	不治の病
あけい	あんげい	わきの下の痛み
あけい	あんげい	熱性のひきつけ
あけい	あんげい	胸のつかえ感と胸膈感
あけい	あんげい	胸膈に気鬱が滞り、胸膈よりやや心下に及ぶが、心下満ではない
あけい	あんげい	胸全体が痛むこと
あけい	あんげい	ひきつけ
あけい	あんげい	胸中が穿通した状態で、俗に言う「胸がいつかいたこと」
あけい	あんげい	胸中に低圧する体のある状態あり通気度で通気状態が「寒」、不足している状態が「虚」
あけい	あんげい	病気の性質が薬証か脈証か対する性質のどちらであるかを判断し、診断を下すこと
あけい	あんげい	病部があまり元気がなく、気、血、津液が不足したために発症した病気のことで、症状は激しくない
あけい	あんげい	虚寒の分類では虚証、寒熱の分類では寒証症状でも熱証症状のどちらにも属さない虚証
あけい	あんげい	気が過度に低下すること
あけい	あんげい	虚証は病気の主要な治す生薬、臣薬は虚証を助けて治療効果を高める
あけい	あんげい	後腹の一つで胸部に分布して関節の動きに深く関わる
あけい	あんげい	後腹部から頭部の後面にかけて凝った状態
あけい	あんげい	月経
あけい	あんげい	フワリが晴れ明け方の一番気温が下がる時間帯の雨。五更の刻(夜明け前)の雨という意味で、五更雨(ごうしゃ)ともい。脾胃陽虚という冷えが強い場合に起こる
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	結まて凍れないという意味。腫脹と陰証が伴い、腫脹は手足の冷えはあるが指の甲は温かい、陰証は指の甲も冷たい状態
あけい	あんげい	他曹的に手足の体温が低いケースの中で、患者自身が手足の冷感も耐えられるもの。厥寒は厥冷よりも冷えが軽い
あけい	あんげい	体、特に四肢の冷えのひどいこと。冷えが肘や膝の上にも及ぶ
あけい	あんげい	上腹部正中部、特に剣状突起付近がやや膨脹して、右のように硬くなって痛みもある状態
あけい	あんげい	月経痛
あけい	あんげい	他曹的に手足の体温が低い場合のうち、患者自身が自覚しないもの
あけい	あんげい	寒熱の強い下痢で「寒の熱証」を意味する
あけい	あんげい	虚飲(水腫)の症状で、水を飲んだ後でせきが出て、眠が引いて寝て寝て
あけい	あんげい	適切な治療がないと治癒しない症状
あけい	あんげい	厚とある処方(=薬方)に、必要に応じて処方の生薬を減らすこと
あけい	あんげい	すでにある処方(=薬方)に、必要に応じて処方の生薬を減らすこと
あけい	あんげい	硬い状態を指す
あけい	あんげい	口腔内に乾燥していること
あけい	あんげい	瀉下剤、吐剤、発汗剤などにより、積極的に病気の原因を取り除いて捨て去るための薬劑
あけい	あんげい	病気の寒熱、その性質の寒熱
あけい	あんげい	中国で現存する最古の医学書。黄帝という古代の伝説上の王とその臣下が問答する形式で書かれている。「素問」と「靈樞」から成り、素問は主に人体の生理・病理などの基礎医学の内容を、靈樞は針灸療法の具体的な運用理論を述べている
あけい	あんげい	胃腸の消化吸収力により飲食から得られる気(エネルギー)
あけい	あんげい	後腹部から背部にかけて凝った状態
あけい	あんげい	後腹が正中に凝りこむこと
あけい	あんげい	2~3種の虚寒が同時に発症するのではなく、ある一つの虚寒の寒証を指す。太陽陽明、少陰陽明、太陽少陰、三陽合病の4種がある
あけい	あんげい	後腹部が凝った状態
あけい	あんげい	食物を中心とした、飲食物が持っている気(エネルギー)
あけい	あんげい	後腹部の痛みで陰証がでないこと
あけい	あんげい	食物の性状で熱、寒、湿、暑
あけい	あんげい	寒熱を失って得ること
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	へその近くで大動脈の拍動に触れること。虚あるいは神経質な状態を示す徴候
あけい	あんげい	へその近くで大動脈の拍動に触れること。虚あるいは神経質な状態を示す徴候
あけい	あんげい	毛細血管の拡張した状態を指す
あけい	あんげい	寒熱
あけい	あんげい	急性熱症以外の症候の総称
あけい	あんげい	虚寒証における虚証の総称。三陽は太陽、陽明、少陰。三陰は太陰、少陰、厥陰
あけい	あんげい	みぞおちがなく、力が入らなくて、しびれて痛いこと
あけい	あんげい	食物の性状で寒、熱、湿、暑
あけい	あんげい	鼻からの出血
あけい	あんげい	手足が冷えること
あけい	あんげい	大、小、緩、急、奇、偶、復という7つの薬方。「大」は作用が強い分量が多い薬方、「小」は作用が弱い分量が少ない薬方、「緩」は作用が緩やかな薬方、「急」は作用が強い薬方、「奇」は雄方、「偶」は雌方という
あけい	あんげい	腫脹で寒熱の寒証、寒熱、寒熱など、寒熱ともいう
あけい	あんげい	寒熱の分類では寒証、寒熱の分類では寒証に属する寒証
あけい	あんげい	病部が狭く病気が熱いあり、正気があり、体の防御力が対抗しきれずに発症した病気のことで、病状は一過性で激しい状態
あけい	あんげい	腎臓虚
あけい	あんげい	胃の辺りのつかえを解消すること
あけい	あんげい	邪とは病気を引き起こすする病邪、正は病邪から体を守る正気のこと。病邪の力が正気を上回って病気になること
あけい	あんげい	薬を効用によって、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉、瀉の10種類に分けて使うこと
あけい	あんげい	冷やせる症状、寒証は正気があるために現れたり、隠れたりする症状
あけい	あんげい	手足の温度
あけい	あんげい	自然に任せなくても容易に治癒する症状
あけい	あんげい	食べ物が口から胃、腸、肛門という流れは、隠り続けているので、その食べ物が栄養物を取り出して、詰まらず、上げるのは胃の作用と表える
あけい	あんげい	体を上、中、下(上焦、中焦、下焦)に分けて、腸胃より上を上焦、腸より下を中焦とする
あけい	あんげい	四肢の関節を頂点として等辺三角形の範囲の筋力が強く凝っている状態
あけい	あんげい	積聚
あけい	あんげい	子宮
あけい	あんげい	死の前兆に現れる、一時的に症状が軽くなるような状態
あけい	あんげい	病気に伴う下痢
あけい	あんげい	みぞおちの膨脹感で、下から突き上げてくるような不快感
あけい	あんげい	みぞおちを指すあるいは拳で軽くたたくと、胃内からの水音が聞えることで胃内振水ともいう
あけい	あんげい	心下痞堅
あけい	あんげい	心下痞堅
あけい	あんげい	みぞおちにつかえの自覚症状があり、熱ると上腹前、特にみぞおちの膨脹感が強まって硬く、指先で圧迫すると抵抗感のあるもの
あけい	あんげい	みぞおちにつかえの自覚症状があつて、他曹的に膨脹感を認めるもの
あけい	あんげい	みぞおちだけの膨脹感
あけい	あんげい	寒熱しても腹の熱で、寒の方が真であること。熱はあっても陰液で力がない、尿は清濁、寒熱の劑を用いると病状は寒化するので、四逆湯などで寒を温めるとよい
あけい	あんげい	精神を機能させる気(エネルギー)で、godではない
あけい	あんげい	神経症
あけい	あんげい	体が重い感じ、寝たてで起きられない状態
あけい	あんげい	体が重く倦怠感があること
あけい	あんげい	神経性意識不障害
あけい	あんげい	体が重苦しく痛むこと
あけい	あんげい	身体より症状が強い状態
あけい	あんげい	何となく経脈のほろひのよりに胸中が熱いこと
あけい	あんげい	心中の熱い煩悶
あけい	あんげい	心臓がある部分に痛むこと
あけい	あんげい	寝たてで起きられないような疼痛
あけい	あんげい	寝たてで起きられないような疼痛
あけい	あんげい	中国の漢代から三國時代の間に成立した薬物書
あけい	あんげい	神経痛およびその原因疾患
あけい	あんげい	血液以外の体液を指し、その増減も食べた概念
あけい	あんげい	水分の代謝障害で、主な症状はむくみとめまい
あけい	あんげい	腸胃の寒熱
あけい	あんげい	腸胃に現れる諸病
あけい	あんげい	腸にたいがつかえが凝っているような重苦しい感じ
あけい	あんげい	飲食物(水穀)を消化吸収し、その内の中から取り出した栄養。これを心や腸の力で、全身に分布し、体を養っている
あけい	あんげい	両腕から受け継いだ気(エネルギー)。腎(じん)に蓄えられているため、腎気とも呼ばれている
あけい	あんげい	呼吸を機能させる気(エネルギー)
あけい	あんげい	五臓六腑のどこにも不具合が出ているのかを見極めて病気の原因を探ること
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	口からの分泌液で、粘り気があるて濁っている
あけい	あんげい	体内に凝った水分が招く代謝障害
あけい	あんげい	へそから三寸(約8cm)下にツボ、開示ともいう
あけい	あんげい	中国内蔵学
あけい	あんげい	陰と陽がバランスよく保たれている状態
あけい	あんげい	機能を回復して、回復させていくという意味
あけい	あんげい	寒熱と寒熱の失調を是正し、緩和する事で、病邪を解除する方法
あけい	あんげい	陰寒
あけい	あんげい	陰寒
あけい	あんげい	「喜、怒、憂、思、恐、驚」の七情を節制しないで、過剰な状態が長時間続き、臓器を損なう病態
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	舌苔が白く厚くついたりした状態
あけい	あんげい	病気の寒熱か病邪の性質を見極める方法
あけい	あんげい	病邪(消化や栄養吸収など)をコントロールするエネルギー
あけい	あんげい	外感と内傷の2つに大別される。【外感】①火(熱い、倦怠感、出血)②燥(乾燥、うるおいがなくさつき)③湿(重い、濡る、粘る、下へ流れる)④暑(炎天、蒸発作用)⑤寒(冷える、縮む、流れが止まる)⑥風(軽い、変化、揺り動かす)⑦虫(虫や獣による)⑧疫(病)⑨毒(精神的な病気の原因)喜・怒・思・憂・恐・驚(2)飲食不調(食事による病気の原因)勞・逸(過労や休まずによる病気の原因)偏食・過食・栄養不良・飲み過ぎ・過労・心労・過剰な性行為など⑩血と水の代謝障害
あけい	あんげい	主として病(体の外から入る病邪)が原因となつて起る病気に対し、原因を探ること
あけい	あんげい	病気の原因
あけい	あんげい	病気の根本でない部分に対して治療するという原則
あけい	あんげい	病気の性質が薬証か脈証のどちらであるかを判断
あけい	あんげい	風熱の邪が完全に散らず、皮膚に留まっている状態
あけい	あんげい	治療目的に用いる動植物も動物の製剤
あけい	あんげい	病気の根本を治療するという原則(病状が落ち着いているときに行う)
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	冷えなどで腫れこわばっている状態
あけい	あんげい	生命の根本
あけい	あんげい	天から得られて人体の機能活動をつかさどる気(エネルギー)
あけい	あんげい	
あけい	あんげい	病気の原因が休みすぎ
あけい	あんげい	心身の過労
あけい	あんげい	邪が少陰にあるというは、陰性の病邪が半表半裏の部位にある状態
あけい	あんげい	薬物の透過・緩和作用によって、病邪を解除する目的を達成する